

漁海況旬報

14 - 1

ちば

平成14年1月7日発行
千葉県水産情報通信センター
千葉県水産研究センター

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。

2001（平成13）年の漁海況概要

【海況】

黒潮は周年を通して、房総半島（野島埼SE，太東岬SE沖合）から徐々に離岸しました。1～3月は約35マイルの離岸であった流路は、10～12月に100マイル以上離岸しました。流型は概ねC型でしたが、年末にはD型となりました。

沿岸水温は外房、銚子・九十九里海域ともに、海面で「平年並」～「やや高め」となりました。また、200m深では「やや低め」～「やや高め」となりました。海面より200m深水温が平年より低くなったのは、黒潮離岸の要因である冷水塊の影響によると考えられます。

【マイワシ】

北部太平洋海区（青森県～千葉県）のまき網による年間総漁獲量は8.2万トン（暫定値）で、前年（22.2万トン）の37%に減少しました。県内主要5港（銚子・飯岡・片貝・大原・鴨川）における年間水揚量は5.8万トン（暫定値）で前年（12.0万トン）の49%に減少しました。

房総海域では1～4月に産卵準備期・産卵期の、5～9月に索餌北上期の成魚（いずれも1998年生まれの2歳魚主体）が来遊しました。魚体の大きさは1～2月では体長17.0～19.0cmの中羽・ニタリイワシ、3月は17.0～21.0cmの中羽～大羽イワシ、4～5月は18.0～21.0cm、6～9月は19.0～21.0cmのニタリ・大羽イワシ主体でした。この間1999年生まれの1歳魚は、三陸～房総海域の広い範囲にかけてほとんど来遊しませんでした。1歳魚の加入がなかったことが、当年の水揚げ減の要因といえます。9月中旬～11月中旬は、まとまった漁場形成はみられませんでした。しかし11月下旬以降、常磐南部海域～鹿島灘を主漁場に未成魚（2000年生まれの0歳魚）のまとまった漁獲が続き、銚子港にも水揚げがありました。未成魚の大きさは体長13.0～14.0cmの小中羽イワシでした。

【カタクチイワシ】

北部太平洋海区（青森県～千葉県）のまき網による年間総漁獲量は10.9万トン（暫定値）で、前年（15.4万トン）の70%に減少しました。県内主要5港（銚子・飯岡・片貝・大原・鴨川）における年間の水揚量は7.8万トン（暫定値）で、前年（9.3万トン）の84%に減少しました。

資源量水準は、2歳魚（1998年生まれ）では高かったものの、1歳魚（1999年生まれ）では前年を大きく下回りました。マイワシ同様、1歳魚の加入が低調だったことが水揚げ減の要因となりました。ただし房総海域では5～8月に成魚産卵群（2歳魚）、9月に未成魚北上群（0歳魚）主体に前年を上回る漁獲がありました。このため本県主要港では北部太平洋海区全体に比べ、水揚量の減少率は小さくなりました。

房総沿岸海域で漁獲された主な銘柄は、1～8月は体長11.0～13.0cmの中ゴボウセグロ・ゴボウセグロ、9～11月は6.0～9.0cmのジャミセグロでした。11月末に常磐～房総海域で12～13cm台のゴボウセグロ（2歳魚主体）の南下来遊が始まりましたが、年末までの漁況

は前年より低調となりました。

【さば類】

千葉県のためすくい船5隻による1～6月の水揚量は、マサバ8トン（前年139トン、1隻当たり0.4トン）、ゴマサバ2,901トン、1隻当たり9.9トン（前年3,340トン、1隻当たり9.3トン）でした。一都三県主要港の水揚量はマサバ35トン、ゴマサバ6,007トンで、マサバは平成9年漁期に次ぐ史上2番目の大不漁年となりましたが、ゴマサバは引き続き高い水準で推移し、4年続けて5千トンを上回る安定した資源状態が続いています。ためすくい漁は1月中旬から三宅島周辺でゴマサバ主体に1隻当たり10トン以上の好漁で始まり、その後、2月上旬には利島周辺でマサバを対象にした操業が数日間みられましたが、再び三宅島周辺でのゴマサバ操業が続きました。前年に続いてマサバの主漁場となるひょうたん瀬での操業はありませんでした。魚体はマサバ尾叉長35～38cm、ゴマサバ尾叉長27～31cmが主体となっていました。

北部太平洋海区（青森県～千葉県）のまき網によるさば類水揚量は12月末で約7.0万トンで、前年（5.6万トン）を1.4万トン上回りました。銚子港への水揚量は約4.3万トン（サバ主体マアジ混じり）で、前年（2.1万トン）の2倍に増加しました。これは春季のゴマサバ混じりの漁況や南下期の漁場が昨年より早く常磐以南の海域に形成されたことも要因としてあげられます。まき網漁獲物は夏季までマサバ尾叉長25cm前後、秋季以降は30cm前後に成長したいずれも1999年級群（1歳魚）が主体となっていました。

【サンマ】

棒受網大型船（40トン以上）は8月20日に解禁となり、12月中旬をもって大半が終漁となりました。本年漁期の総水揚量（40トン未満船および流し網船による水揚量含む）は21.1万トン（暫定値）で、前年（13.5万トン）を大きく上回りました。

県内大型船も12月16日までに全船終漁となりました。県内大型船9隻のうち7隻の総水揚量は6,134トン（暫定値）で、前年（8隻で4,031トン）を上回りました。

主漁場は10月中旬まで道東海域にあり、10月下旬～11月前半は三陸海域、11月後半以降は鹿島灘に移りました。

漁獲物の大きさは、漁期全体では体長27～28cm台の中型魚主体に31～33cm台の大型～特大魚の混じりでしたが、10月以降、特大魚の割合は次第に減少しました。

【カツオ】

今春の漁は例年より2旬早い、2月中旬に勝浦沖に漁場が形成され、本格的な操業が始まりました。勝浦・川津・天津・船形港の1～6月の水揚量は336トンで過去7年平均（549トン）を大きく下回りました。今漁期は例年4～5月が盛漁期となりますが、4月下旬～5月中旬が盛漁期となり、その期間が短くなってしまいました。これは盛漁期となる期間に黒潮が大きく蛇行したことが原因と考えられます。魚体は概ね例年どおり、尾叉長43～45cmが主体となりましたが、2～3月は50cm前半が半分程度占めました。

また、7～11月の勝浦・川津・天津・船形港の水揚量は81.0トンでした。昨年のような極小型魚（38～40cmE-D）が水揚げされる好漁（321.2トン）とはならず、中・大型魚（50～54cmE-D）主体で過去9年平均（62.4トン）を上回る水揚量でした。

【スルメイカ】

勝浦・天津2港における釣りスルメイカの水揚量は107トンで、前年同期（23トン）の5倍に増加しました。初漁は6月6日に勝浦沖でありましたが、8月までは着業隻数も増加し1隻当たり100kg以上で、好漁が持続しました。10月中旬以降、期待された秋漁でしたが、着業船は大幅に少なくなり、特に11月以降の漁況は夏漁の半分程度の1隻当たり50kgでし

た。魚体は漁期初めに外套長23cmの小型魚主体，その後徐々に成長し，9月以降は26cm以上の大型魚の割合が増加しました。